

写真家 佐藤順子の見た 阿波人形浄瑠璃

会期：令和4年12月3日（土）～18日（日） 休園日：12月8日（木）・15日（木）

時間：午前10時～午後4時

会場：神戸市立須磨離宮公園内 和室

徳島県徳島市^{はたごおう}八多町の五王神社では、毎年11月3日、境内の^{いぬがい}犬飼農村舞台において人形浄瑠璃芝居が奉納されます。神戸女子大学古典芸能研究センターでは、神戸在住の写真家 佐藤順子氏より、この人形芝居を撮影した一連の作品を受贈しました。

1984年にこの芝居と出会って以来、ファインダー越しの佐藤氏の視線がとらえた農村舞台の記録は、作品「^{ざんせい}残生」として東京・大阪・ニューヨーク・チューリッヒなど、国内外の展覧会で発表されてきました。作品集『残生 A Moment of Life』の中で、氏は、「人形達の つかの間の、生きた様子を、私の、作為とか、テクニクとかではなく、人形達の息使いを、感じるままに、シャッターを、押すと言う作業の中で、生まれた作品」と述べています。

今年の特別展示では、人形とそれをめぐる人々、舞台や楽屋の様子など、地元の徳島以外では未公開の貴重な作品を中心に、「残生」の作品も一部展示します。また、センター所蔵の「かしら文庫」から、関連する資料も展示します。ぜひご覧ください。

神戸女子大学古典芸能研究センター特別展示によせて

1984年11月、勝浦座の皆さんと初めて、神戸税関から徳島の小松島の税関になった写友の紹介でご縁をいただきました。以前より文楽に興味があった私は、農村に根づく人形浄瑠璃があることに驚き、感動とともに奥深さを感じたいと切に感じました。勝浦座には二百年以上の伝統があり、終戦の混乱の後も、座員の有志が資金を出し合い、座を支えてこられたそうです。その熱い思いが勝浦座の根底にあるように思います。

ご縁をいただいた時の座長が倉橋春一翁でした。倉橋座長さんは大変魅力的な方で、シャッターを押しつづけた記憶があります。年月がたつにつれ、座の方々とも親しくしていただき、公演の時には毎年かかさず撮影にまいりました。お弁当など私の分もいつも用意してくださり、心置きなく撮影をさせていただきました。このたびの特別展の開催にあたり、その時の記録が鮮明に蘇り懐かしく、1枚1枚その時の記憶をかみしめながら制作をいたしました。もう逝去された方々がおられます。それぞれの足跡をほんの少しでも残すことができたらの思いです。そして伝統のある勝浦座の一時期の記録として保存できることに、座の皆さまとともに誇りにしたいと思います。

嬉々として演じていらした座員の皆さまの様子が目に浮かびます。今も続く勝浦座の伝統、日本の地に根ざした古典文化の原点だと思えます。日ごろ農家の仕事にいそしみ、祭には黒子に、そして人形浄瑠璃を楽しむ。素敵な日常から文化が育まれる、日本のすばらしさだと思えます。いつまでもこのことが続きますように願っています。

そして勝浦座のおかげで「^{ざんせい}残生」という人形達の作品も制作することができました。感謝です。30年ぶりにあの時の勝浦座の皆さまにお会いできたようです。

このたび、河田千代乃氏（神戸女子大学名誉教授）のご紹介で古典芸能研究センターに作品を寄贈したご縁で、記念の特別展示をセンターが企画してくださいました。今後、作品が研究資料として保存・活用されることを期待しております。

令和4年12月吉日

佐藤 順子

佐藤 順子 プロフィール

- 1937年生まれ 1971年より故本^{ほんじょうこうろう} 庄光郎師に師事
- 1984年 徳島県犬飼農村舞台と出会い、以来公演のつど撮影をする
- 1988年～93年 東京・大阪ミノルタフォトスペースにて、農村舞台の作品「^{ざんせい}残生」個展
1991年には新神戸オリエンタルホテルにて個展
- 1996年 徳島県勝浦町の農業環境改善センターにて、「人形と共に生きて」個展
- 1996年 「From Memory」日本初の公害問題を呈した、銅の精錬所の跡地の作品 大阪梅田キャノンサロンにて個展
- 1998年 徳島市シビックセンターにて、「犬飼農村舞台と阿波の人形芝居」個展
- 1998年～99年 神戸市立二宮小学校廃校の校舎を取り壊す前に撮影「流れのなかで」 神戸 サンプル市民ギャラリー、
金沢 スタジオ888、大阪 文情フォーラム等にて個展
- 2003年 スイス チューリッヒ大学附属民族博物館にて4月～8月の四ヶ月間、「残生」個展
- 2005年 1月、阪神淡路大震災十年を記念して「あの刻から…神戸1995. 1. 17. 5:46」、神戸 サンプル市民ギャラリー
にて個展
- 2007年 神戸 GALLERY北野坂にて、「残生」個展
- 2011年4月～12年3月 スイス チューリッヒ、ギャラリーSatoにて、フォトグループ萌葱のメンバー4人と共に、
日本の今を伝える写真展開催 その後ベルンほかにて一年間巡回
- 2015年 11月、神戸 ギャラリーほりかわにて、企画展「残生」
- 2017年 ニューヨーク 日本クラブギャラリーにて、「残生」個展
- 2021年 神戸 GALLERY北野坂にて、「Love 神戸」個展

*1984年～2004年大阪浪華写真倶楽部在籍 倶楽部写真展20年出版 『日本カメラ』、『フォトウエーブ』など、月刊誌多数掲載
神戸二宮小学校廃校の記録「流れの中で」、阪神淡路大震災の記憶「もうひとつの軌跡」は、神戸市アーカイブに永久保存

以上

(2022年12月 佐藤 順子)

〔展示作品〕

本展示は、徳島の犬飼農村舞台における勝浦座の奉納上演に関わる作品を中心としている。今回は会場の都合もあり、全59点を犬飼農村舞台と人形・舞台の上演の様子（太夫、三味線、囃子方などを含む）・楽屋の情景・「残生」の作品を中心にした人形、の4つに分け、セクション名を付して配置した。作品には個別タイトルがないので、以下、セクションごとに作品番号（古典芸能研究センター整理番号）を示す。

別置…玄関正面1点：1（人形）、 床の間2点：29（勝浦座二代座長 倉橋春一氏）・24（犬飼農村舞台）

- I 「秋が深まり、^{うたげ}宴の時が近づく」（犬飼農村舞台と人形）…15点
22・23・25・28（犬飼農村舞台）／26・27・37（雨天の舞台）／7・11・12・13・14・16・17・20（人形）
- II 「幕が^あ開き、人形たちが動きはじめる」（上演の様子）…14点
30・35・56・61（太夫、三味線）／31・33・34（上演舞台）／32・36・38（「三番叟」上演）／
43・49・54・59（囃子方、楽屋口）
- III 「舞台へ出て行き、舞台から帰る」（楽屋の情景）…16点
41・52・55・58（演者）／40・42・44・45・46・48・53・60（人形）／47・57（演者）、51・50（倉橋氏）
- IV 「人形たちの息吹」（「残生」を主とした人形）…11点
2・3・4・6・8・9・10・15・18・19・21

阿波人形浄瑠璃について

庶民の娯楽として古くから愛されてきた人形浄瑠璃は、16世紀末に淡路島で発祥したといわれている。徳島では、江戸時代に阿波藩主・蜂須賀公の庇護・奨励を受けたことから、人形浄瑠璃が盛んに上演されてきた。また、徳島県は、現存する農村舞台の数も全国一であり、現在も地域ごとに地元の人形座による公演が定期的に行われている。

「勝浦座」(所在地：徳島県勝浦郡勝浦町大字久国)

県内有数のミカン産地である勝浦町を拠点とする「勝浦座」は、江戸時代に発足した人形座で、徳島で最も伝統ある人形座の一つ。上演できる演目は約30で、国内外での公演のほか、徳島市八多町の「犬飼農村舞台」では、毎年11月3日に人形浄瑠璃芝居を奉納している。

佐藤氏の作品にみえる故倉橋春一氏(作品番号29・50・51)は、二代座長。

阿波の農村舞台について

農山村にあって芝居を演じる常設の施設を「農村舞台」と称する。各村では、人形座を迎えるために上演舞台を常設した。他県の舞台は、その多くが歌舞伎舞台であるのに対して、徳島県の場合は大半が人形芝居の舞台である。阿波の農村舞台が建設され始めたのは幕末期のこととされる。村の鎮守の神社では、豊作祈願や豊作感謝の祭が行われ、農民は歌や踊りなどの芸能を奉納していた。この奉納芸が、盆踊りから人形芝居に移行し、農民は自分たちで人形操りを稽古する練習場所として、村の共有地である神社の境内に農村舞台を建設したという。阿波の農村舞台は、浄瑠璃を語る太夫が座るための太夫座付きの人形芝居系である点に特徴がある。

いぬがいの 犬飼農村舞台

徳島市八多町の五王神社境内にある人形芝居の野外舞台。明治6年(1873)に建造、現在は地元保存会によって保存・活用されている。芝居をおこなった当時の機構が、最も原形に近い状態で残っていると、平成10年(1998)、国の重要有形民俗文化財の指定を受けた。からくり機構を使って襖絵を操り、舞台背景を展開する。からくり機構の下には、空間を有効利用するために地下に設けた舟底楽屋がある。こうした楽屋の形式は、徳島でも他には見られない貴重なものである。

阿波人形浄瑠璃の人形と人形師

阿波の人形浄瑠璃の最盛期は江戸末期から明治時代にかけてで、淡路の48座をしのぐ67座があったといわれている。その隆盛によって、人形浄瑠璃に欠かせない人形師(人形製作者)が阿波では数多く輩出された。享保期(1716~36)頃に馬之瀬駒蔵、万芳、利貞、天明期(1781~89)頃には利重や鳴州、卯之助、近蔵など、明治期(1868~1912)には大江常右衛門、大江順衛門、原田増太、人形富(川島富五郎)、人形忠(横山忠三郎)などがおり、明治期以降活躍した人形師に、初代から三代の天狗久、天狗弁などが挙げられる。

初代天狗久はとりわけ名高く、天狗久三代が使用した用具及び製品等1,158点は、「阿波人形師(天狗屋)の製作用具及び製品」として国の重要有形民俗文化財に指定されている。

人形のかしら比較 ~阿波の木偶(人形)と文楽の人形~

かしらのサイズ:

文楽人形のかしらのサイズは4寸(約12センチ)、阿波木偶はおおよそ6寸(約18センチ)と、阿波木偶の方が大きい。「かしら」の漢字は、阿波では「頭」の字を当てるが、文楽では「首」と書く。

かしらの塗り

文楽人形は照明の乱反射を避けるため、艶消しの仕上げになっている。一方、阿波木偶は、小屋掛け・農村舞台など照明が行き届かない場所で人形を映えさせるため、光沢をつけたとされる。

種類

阿波木偶は、文楽人形に比べると種類が少ないのが特徴。文楽では「文七」「源太」など最初に使った役名がついているが、阿波木偶は「角目」「丸目」など主に形状を基本にした名称で呼ぶ。阿波木偶は頭の種類

を少なくし、一つの頭の鬘かつらや飾り物、衣類を変えることで幾通りもの役柄に変化させる。これは移動公演が主体であったためらしい。

人形制作者

阿波では人形の頭の制作者を「人形師」と称する。阿波に人形制作の技術が伝統的に栄えたのは、淡路島の人形座が全国巡業して活躍していたことと、阿波の村々に多くの人形座が存在していたことによるとされる。なお、文楽では「人形細工師」と言う。

〔関連展示資料〕

今回の展示では、佐藤氏の作品に加えて、古典芸能研究センター蔵「かしら文庫」内にある関連資料を用いて解説パネルを作成し、併せて調査資料や書籍類も紹介した。

「かしら文庫」とは

日本各地に伝わる操り人形と人形座（人形芝居を伝承・上演する一座）に関する歴史研究の専門家であった故加納克己氏（1944～2020）が、自らの研究のために調査・収集した資料群。各地の人形浄瑠璃や人形のかしら（頭の部分）に関する記録と文献資料など約3850点から成る。2012（平成24）年6月に、ご本人より本学に寄贈された。著書に『日本操り人形史—形態変遷・操法技術史』（2007年、八木書店）。

〔写真・映像〕

- ・勝浦座の人形のかしら（一部）、および「三番叟」上演時（2003年3月16日）の撮影写真
- ・勝浦座による「三番叟」奉納上演時（1989年9月26日）の撮影写真および映像

勝浦座の「三番叟」について

「かしら文庫」中の「三番叟」奉納上演の撮影映像は、オリジナルはVHSビデオテープで、勝浦座の上演の前後に淡路と安乗あのり（三重県志摩市）の三番叟が収録されている。勝浦座の収録部分は40分あまりで、勝浦町久国の地神社の祭礼（1989年9月26日）で奉納された「三番叟」と、その後、場所を変えての上演（公民館か）、続いて三人遣いの「えびす舞」上演、さらに終演後の聞き取りの様子がおさめられている。終演後は加納氏が人形の撮影をしたり、人形の遣いかたなどを尋ねたりする様子も映っている。加納氏の調査の様子がうかがわれるひとこまである。

▽「三番叟」

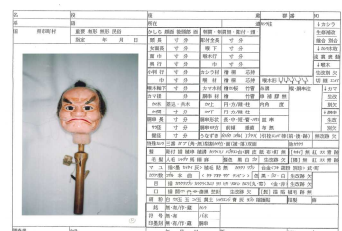
三番叟（式三番）は、淡路や徳島の人形のもっとも古い形式を伝える神事であり、千歳せんざい、翁おきな、三番叟の三体の人形が一人遣いで操られる。淡路や徳島では門付三番叟が各家ごとに回って家内安全を祈願するとともに、棟上げ等、事の始めに必ず行われたと伝える。

（参考『国立文楽劇場第5回民俗芸能公演「ふるさとの人形芝居—岐阜・恵那文楽と徳島・勝浦座—』上演パンフレット、1996年3月）

*文庫蔵の資料（詞章）や調査で撮影された「三番叟」映像によると、千歳・「翁」を「一番叟」「二番叟」と称している。これは「三番叟」が三番目に登場することから、登場順に呼ばれたものか。

勝浦座の人形・かしらについて

加納氏は、2003年に勝浦座を再訪し、同座所有の人形頭43点（三番叟の三体を除く）の撮影もしている。こうした調査時の写真は、かしら1点ごとの調査記録票に正面から撮影した写真を貼付け、さらに別の角度から撮影したそのかしの写真3枚を貼付けた別紙と併せたかたちで保存されている。写真には作者の銘が確認できるものも含まれており、勝浦座関連の記録票に記載がないことが惜しまれる。



かしら文庫の調査記録票